

# 鳥獣害便り

## やまだのかかし

地域の鳥獣害をサポートするサイトです

編集・発行者：山村 準  
Tel:0595-63-1725  
Emal: jyun.y@asint.jp



### 獣害の歴史

獣害は今に始まったものではなく、歴史を遡ると万葉集などにも獣害にまつわる悲しい歌が残されています。先人たちの涙ぐましい姿が見えてきます。

#### ◆弥代生時代と古墳時代

弥生時代とは、紀元前10世紀頃から紀元後3世紀中頃までにあたる時代で、魏志倭人伝に出てくる卑弥呼が国を治めていた時代と重なります。

古墳時代とは、三世紀中頃から六世紀末頃までを指し、全国で前方後円墳などの巨大な古墳が造営された時期を言います。

この時代には、大和王権が統一政権として確立され、それまでの「倭国」という国号から「日本国」という国号に変更されるなど、古代国家としての日本が成立しました。

#### ◆大和政権はもともと邪馬台国だったという説があります。

縄文時代ではシカやイノシシ、サル、クマ、ウサギなどが狩猟の対象となっていました。その反面、野生動物は畏敬（全てのものに霊魂・霊が宿っているという考え方）の対象でもありました。しかし、弥生時代、農業が盛んになると田畑を荒らす害獣としての認識が強くなり、両者間では軋轢が高まりましたが、シカ、イノシシ、サルなど、先住者であるこれら野生動物と多様な関わりをもちながら、縄文時代から江戸時代まで、一種たりとも絶滅させることなく「棲み分け共存」を図りながら生息域や生息域を大きく変化させることなく繁栄してきたのです。

#### ◆弥代生時代の犬

世界で最初に家畜として扱われたのは犬で、弥生時代では、農作物の被害対策に犬が登場してきます。日本犬の原型は、縄文時代の犬と弥生時代に大陸から渡ってきた犬との交雑種で、日本犬の祖先といわれていますが、普段私たちが目にする犬は、「タイリクオオカミ」と呼ばれるオオカミの一種として分類されています。日本犬のルーツは「タイリクオオカミ」とも考えられています。

日本での人間と犬のかかわりは古く、縄文時代では狩猟採集生活であったため、犬は主に狩猟用に使われていたことが推測されます。

また、農耕が盛んになった弥生時代では、犬は農地を守る番犬として使われるようになりました。その一方で、食用にも使われていたと言います。それは縄文時代の遺跡から出土するイヌは埋葬されていたように見えます。弥生時代の遺跡からは、解体された犬の骨が多く出土することから食用にされていたようだと考えられています。

#### ◆弥代生時代と家畜

古来から日本では、家畜を育てる習慣がなく、主に狩猟でのシカやイノシシを食べていました。弥生時代、イノシシが家畜化され、豚（イノブタ）が誕生しました。

イノシシは、免疫力が強く環境への適応性にも富んでいて家畜化することが容易な動物で、人口増加が進む弥生時代、安定した動物性タンパク質の供給源となっていたと思われるます。

西日本では、猪飼部や猪飼野と言った名称が今も残っています。その飼育がかなり多かったことが推測されます。



常世長鳴鶏

#### ◆家畜が与えた社会への影響

弥生時代、家畜の存在が人々の生活に大きな変化を与えました。定住して農耕を行うには、狩猟以外の獣肉の確保が必要で、それを補うのが野生動物の家畜化だったのです。

これまでに縄文時代の人々は、獲物を求めて移動しながら食料を確保するという狩猟採集を基本とした生活をしてきたため、食料を安定的に入手することが困難という問題がありました。しかし、農業を始めた弥生時代では、定住化が進み一定の居住地で、集団作業による稲作や、家畜を飼育することによって、安定して食料を手に入れることが可能となり、人口の増加・文明の発展が加速していききました。

家畜は、古代から現代まで、どの文明においても人類とは切り離せない間柄なのです。例えば、馬は戦争において強力な兵器となり、ロバや牛は農耕や物資輸送に用いられます。鳥では鳩が「伝書鳩」と言われ通信で用いられているなど人類と家畜は切り離せない存在なのです。

弥生時代では、代表的な家畜である牛馬は存在していません。古墳時代5世紀に軍事用として朝鮮半島から馬が導入されています。弥生時代では牛や

馬は存在していません。日本では古来から家畜を育てる習慣がなく、主に狩猟で得たシカやイノシシなどの獣肉を食べていました。世界で最初に家畜として扱われたのは犬とされていますが、日本人が犬と生活し始めたのは縄文時代で、狩猟犬として大切に飼われていたようです。

しかし、農業の開始と時期を同じくして、本格的な家畜の飼育が始まりました。縄文時代と弥生時代の日本列島には馬はいませんでした。古墳時代中期になって馬の飼育という新しい文化が、朝鮮半島から持ち込まれ各地に広がって定着してきます。日本に牛が入ってきたのは馬よりも遅く6世紀頃と言われています。

#### ◆動物信仰

古代における人々と野生動物の関係は、「食うか・食われるか」の関係にあり、人は動物を狩った反面、動物に襲われてもいました。しかし、古墳時代野生動物の飼育が始まると、食用や敵対といった関係だけではなく、畏敬や愛情の伴った多面的な動物観が育まれ、いつしか人々は多くの動物を神格化して敬うようになりまし。

日本の歴史の中で信仰の対象とされた主な動物は、干支に出てくる12種を始め多くの鳥獣が信仰対象になっていきます。

◆オオカミ絶滅  
縄文時代と江戸時代までの長い年月、自然界の野生動物を適切な個体群レベルで管理してきたのは、日本オオカミ（以下、オオカミと表記）の存在が大きい影響しています。

しかし、オオカミが絶滅以降100余年、イノシシ・シカなどが激増しています。『オオカミは1905年（明治38年）を最後に絶滅を遂げています』

かつては、日本の生態系の頂点にはオオカミが存在し、生態系の食物連鎖が絶妙なバランスで保たれていて、草食動物の個体数も大きく増えることがなかったのです。

しかし、オオカミの絶滅により、かつては原生林が生い茂っていた

### 日本オオカミ絶滅

1905年（明治38年）1月のこと。東吉野村の鷲家口に滞在の動物学探検隊員（英国ロンドン動物学会とロンドン自然史博物館が企画）が日本の野生動物を収集していると知った村の猟師が、ニホンオオカミの若雄を持ち込んだ。頭と胴をあわせて91.4cm、尾は34.0cmと記録されている。猟師と隊員の間で売買価格の折り合いが付き、このニホンオオカミは海を渡り、今でも英国ロンドン自然史博物館に頭骨と毛皮が保存されている。このときのニホンオオカミが記録に残る日本最後のニホンオオカミになってしまった。



ニホンオオカミの像  
東吉野村

た森林が、シカの食害により樹木や下草が枯死し土壌が崩壊するなど、森林が持っている公益的機能や生物多様性などにも悪影響が目立っています。

近頃、テレビの動物番組などを見ていると、ライオンやチーターといった肉食動物が草食動物を捕らえて食べている様子が報道されることがあります。一見、残酷なようにも見えますが、他の動物を

捕らえて食べる行為は本当に残酷なものでしょうか。牛や馬が草を食べるのと同じで「食うもの」と「食われるもの」による食物連鎖は自然界の摂理です。私たちが牛肉や豚肉などを食べるのも食物連鎖といえるのではないのでしょうか。

植物は、土・水の中の養分や太陽光から、自分で栄養を摂取し花や実をつけます。そしてそれらを食べるのが草食動物や昆虫、さらにそれを食べるのが肉食動物。というように自然界ではピラミッド状の食物連鎖が形成されていたのです。

しかし、日本では、捕食者であるオオカミを絶滅に追い込んで、食物連鎖が壊れてしまいました。食物連鎖の頂点に君臨し、最強の捕食者であったオオカミの絶滅後、シカなどの草食動物が異常に増殖し、森林の草木が食べつくされ、連鎖的に生物の多様性・生態系が大きく崩れてしまっています。



シカによる皮剥被害  
赤目町龍神山

## 冬場の獣害対策

全国各地で日本シカ（以下、シカと表記）の個体数が増加しており、増えすぎたシカは、自然界の植物を餌として大量に消費しています。私たちの暮らしに

物が異常に増殖し、森林の草木が食べつくされ、連鎖的に生物の多様性・生態系が大きく崩れてしまっています。

草食動物の増加に伴う生態系への影響として、まず思い浮かべるのは植物への影響です。シカの好物は様々な植物です。食べる植物の種類は極めて多く、芝や木の葉だけでなく、食べ物の少ない時期には樹皮も食べ尽くし、樹木や植物が枯死し土壌が崩壊している森林が目立ちます。

重要な水源である森の破壊や、農業への被害、生態系の攪乱などさまざまな影響を及ぼしています。

直近30年弱で、シカは8倍イノシシは3.5倍に増加しています。両者とも今後も増えることが予想されています。日本の森における最大の課題となっています。シカは、反芻動物で、少ない食べ物からでも多くの栄養を得ることができます。

農林水産省では、個体数半減を目標とした10年計画を実施中ですが、狩猟人口の減少に加え、有害駆除も思うに任せず駆除数は減少傾向にあります。

◆増えた原因  
シカ増えた大まかな原因は、天敵オオカミの絶滅。明治以来の保護政策。拡大造林政策。山林開発。山間地集落の衰退。狩猟の減少。温暖化等々で、シカの激増の原因全てが、私たち人間活動が「大なり小なり」影響しているというところを肝に銘じ対策を立てる必要があります。

◆減らない原因  
生息数を上回る大量の餌があるからです。シカは、栄養状態がよければ毎年15%程度増えるといわれています。奈良公園ではシカの総数は千頭前後で、増えも減りもせず横ばい状態で推移しているそうです。その理由は、奈良公園には千頭分の餌しかないからだといわれています。

7月中旬です。出産に備え、冬場の餌はシカを始め、多くの動物にとって重要で、その過不足が産数や産後の生存率に大きな影響が現れます。

◆餌をなくす！  
冬場に餌を与えてしまいうような行為をなくすことが、獣害対策上極めて重要となります。冬場、管理・収穫されていない柑橘類なども冬場の野生鳥獣にとって魅力的な餌になります。

秋はイノシシやシカの繁殖時期です。厳しい冬場を乗り越えて春に出産を迎えます。しかし、冬の山は餌が最も少なくなる季節で、イノシシやシカなどは、出産に備えて田畑の作物を狙うようになります。田には「ひこばえ」などが繁茂し、畑には収穫残や、収穫されない放棄された柑橘類が点在して人里は餌付け状態です。

◆適切な個体管理  
シカは、現在増えすぎていると言われていますが、昔は乱獲により絶滅の危機にあったこともあったのです。国は、シカの個体数半減を目標とした10年計画を実施中ですが、この個体数半減が適正レベルかは、地域により変わり、各地域での合意形成が必要になります。シカを適正数に管理するとは、シカが多すぎて被害が深刻になる過密レベルと、少なすぎると絶滅が心配される過疎レベルとの間を指すものだと考えます。しかし、シカは増えやすく、減りやすい個体管理の難しい動物です。今までは「増えれば殺せ」「減れば保護」という泥縄的な保護対策を行ってきたが、森が長く健全であるためには、シカを適正レベルに管理する



イノシシ法面掘り起こし  
名張市矢川にて撮影